

『トゥレム夫人』

—フランス社会に生きる女性の苦悩—

木 戸 美 幸

はじめに

1906年のScribner's8月号に掲載され、翌年2月に本として出版された中編小説*Madame de Treymes* (『トゥレム夫人』) は、イーデイス・ウォートンがフランス社会を題材として扱った初めての作品であった¹⁾。別居中のフランス人公爵との離婚裁判を経て、ニューヨーク時代の知人John Durham (ジョン・ダーラム) との再婚を決意したMadame de Malrive (マルリーブ夫人) と、この二人のアメリカ人の間に立って自分の属するフランス社会を代弁するMadame de Treymes (トゥレム夫人) を軸として、伝統や慣習が、とりわけ社会的弱者の女性を苦しめる様子を描いた作品である。

1906年3月末にパリを訪問したウォートンは、前年にアメリカで記録的成功を収めた*The House of Mirth* (『歓楽の家』) の作者としてフランス社会でも歓迎され、名士、芸術家、知識人の集う社交生活を日々体験することになる。4月中旬にホテルから兄のタウンハウスへ住まいを移したウォートンは、一年の半分である夏季を過ごせるフランスでの自分の家を、すでにこの時点でフォブール街周辺に捜しはじめている²⁾。この夏はアメリカへ戻って過ごしたもの、翌年1907年1月初めに再びパリに渡り、希望どおり45歳の誕生日を賃貸住宅で迎えた³⁾のは、仮住まい的要素の強いホテル生活ではなく、より恒常性のある住まいを選択したことを意味しており、アメリカ社会を離れ、フランス社会に生活基盤をおきたいと望むウォートンの願いを具現化する第一歩であった。さらに二年後パリに居を構えて以降、ウォートンが、後半生の生活の場としてだ

けではなく、永久の埋葬の地として選んだのも、母国アメリカではなく、フランスであった事実は、彼女にとってのフランスの重みを示す証左であろう。

このように自ら選択し、実際に住むことによって体験したフランス社会、フランス人の価値観や生き方が、ウォートンの1907年以降の作品に反映されていくのは当然である。それらは往々にして、アメリカ人であることのアイデンティティとの相克に苦悩しながら、二つの文化を生きる登場人物を描く際の比較材料として、さまざまに作品の中に織りこまれていく。テーマや人物・舞台設定において、『トゥレム夫人』との共通点が見られる作品は少なくない。1912年出版の*The Reef* (『暗礁』) はアメリカ人でありながら、侯爵夫人としてフランスの古城に住むことになったアンナを苦しめるフランスの社会や伝統を批判的に描いた作品である⁴⁾。今は未亡人であるアンナを、かつての恋人ダロウがフランスを訪れる設定は、『トゥレム夫人』におけるマルリーブ夫人とダーラムの関係を想起させる。1913年出版の*The Custom of the Country* (『お国の慣習』) では、アメリカ西部出身のアンディーンが、ニューヨーク上流社会のマーヴェルと離婚後、フランス人伯爵シェルと再婚するために一人息子を利用する点が⁵⁾、離婚に際してなにより一人息子の母親としての役割を重んずるマルリーブ夫人と対極的に描かれるし、1920年出版の*The Age of Innocence* (『エイジ・オブ・イノセンス』) のエレンは、ポーランド人伯爵オレンスカとの不幸な結婚生活に終止符を打って故郷ニューヨークに帰りたいとの思いを許されないため、自ら選択してパリで孤高の人生を送る点において⁶⁾、『トゥレム夫人』が描くマルリーブ夫人の生き方と共有するものがある。

そもそも自分が生来属する文化とは異なる文化に生きることは、どのような意味をもつのであろうか。その生き方を選択したのが女性である場合、それはさらに、特別な意味をもつのであろうか。フランスで後半生を過ごした事実を鑑みれば、ウォートンにとって、ヨーロッパのこの歴史的大国が母国アメリカより多くの点で肯定的な意味をもったであろうことは想像にかたくない⁷⁾。この拙論では、フランス社会との接点(幼少時からのヨーロッパへの定期的訪問を除いて)をもちはじめたばかりの時期に描かれた『トゥレム夫人』を詳細に

読むことで、ウォートンがアメリカ社会とフランス社会の相違をどこに見出し、それが登場人物に及ぼす影響をどのように受けとめて描いているのかを、併せて考察してみる。

I

マルリーブ夫人が手袋をはめるのを待つダーラムの描写で始まる『トゥレム夫人』の舞台は、春のパリである。作品は初秋で幕を閉じるので、描かれる時の経過はおよそ半年であるが、その間、これほどいきいきと話すマルリーブ夫人の描写は、作品初めでダーラムとアメリカ時代の思い出を語るこの時を除いてはない。15年ぶりにダーラムの母親と二人の妹との再会をはたしてきた直後であるため、「『いとしくて、善良で、優しくて、純真な、ほんもののアメリカ人と再びごいっしょできること！』」⁸⁾が、マルリーブ夫人の気持ちを高揚させているのであり、しかも、対話の相手が自分にとって、「『私はあの方たちといれば安全だってことなのです』」(168)という安心感を得られる人物でもあることが、彼女自身によって強調される。しかし、マルリーブ夫人のこの口調には、同郷人に会えたなつかしさを吐露する以上に、自分が現在属するフランス社会への批判と疑念がこめられていることは明らかである。

他方、ダーラムが目をやる新緑のパリの美しさは、「彼自身の嘆かわしいニューヨーク」(165)の醜さとは対照的に彼の目に映っており、作品初めにして読者は、二人のアメリカ人を通して、フランスとアメリカの対比を重層的に示される構図となっている。しかもそれは、フランス人の妻となり、フランス社会に身を置くアメリカ人女性の、なつかしいアメリカ社会への思いと、フランスを訪問中で、フランス的なものを体現するこの女性に求婚するアメリカ人男性の、未知なるフランス社会との対峙という、立場の違いを微妙に反映した対比である。

さらに読者は、マルリーブ夫人の過去と現在の対比を知る。ダーラムの記憶に残る、ニューヨーク時代のFanny Frisbee (ファニー・frisビー)は、「奔

放で、経験豊かで、進取の気性に富んだ」(178) フリスビー家の中でも、とりわけ「元気のいい」(178) 女性であり、彼女の「活発で単純な」(179) 性格は、アメリカ人特有のものであって、彼女をきわだたせるものではなく、したがって、当時のダーラムを魅了するものではなかったという。アメリカを離れ、フランス人公爵夫人となって以来15年の年月が過ぎた今、昔の面影とは対照的な、経験を積み、巧妙で優雅な身の処し方を体得したファニーに、ダーラムは心ひかれている。つまり、ダーラムの心をとらえたものは、アメリカ的なものとは異質な、ファニーがフランスでの生活で身につけたものである。

アメリカ人らしいアメリカ人であったファニーに、15年の年月が与えたフランス的なものとは、いったいどのようなもので、彼女はどのように変化したのであろうか。そもそも、ダーラムやファニーが認識するアメリカ人らしさとは、どのようなものであろうか。それを理解する最初の手がかりは、マルリーブ夫人が、手袋をはめ忘れたままホテルの外に出てきたという、作品冒頭の、一見さりげなく描写される光景である。しかも、この直後にチュイルリー公園での散歩に誘うのは、マルリーブ夫人である。公爵夫人として「声を低め、身振りを規定し、長い過去をもつ社会の、暖色系の薄暗い背景と調和するよう」(179) 常にすきのない行動をとるマルリーブ夫人が、厳守すべきマナーをこのように破ったことは、ダーラムに驚きとかすかな期待を与える。

歴史あるフランス上流社会の一員となったマルリーブ夫人が、なによりも従わねばならなかったのが、伝統であり、慣習であった。これらは疑問をさしはさむ余地を与えることなく、連綿と守られてきたものであり、歴史の浅いアメリカからの新参者がこの社会で認められるためには、とりわけ厳しく遵守することを求められてきたにちがいない。にもかかわらず、明るい午後、人目を気にすることなく、ファニーは、手袋をはめ忘れて屋外に出たばかりか、待たせてあった従僕に馬車を返すよう命じ、夫以外の男性と二人きりで散歩を楽しもうというのだ。自分の属する社会の規則を積極的に破るファニーに、ダーラムが自分に対する好意を期待したのもむりはない。このような積極的な言動は、長年束縛されてきたフランスの伝統や慣習を破壊したいとの、マルリーブ夫人

の心の叫びにも思われる。

ところが、楽しかったアメリカ時代の思い出話の直後、「彼女の顔が瞬間に変化した」(169)のは、夫マルリーブ公爵の話題となったときである。つまり、ここでウォートンは、マルリーブ夫人が不幸な結婚生活と家庭生活に苦しんでいることを暴露し、公爵夫人としてのふるまいを逸脱するほどダーラム一家との再会に彼女が興奮した理由を、つらい現実からの逃避願望であると示唆する。なおその上で、慣習からの逸脱行為は刹那的に過ぎず、現実的にはフランス社会からの離脱を決意させるほどのものではないことも示す。結婚以来アメリカを再訪しなかった理由を、夫への黙従に帰し、別居中の現在でもフランスに留まるのは、『「家庭に理由があるのです。」』(169)と言いつつマルリーブ夫人は、個人主義を尊重するアメリカ人ダーラムには理解不能だ。フランスで辛い思いをしているにもかかわらず、アメリカに帰国しない選択をしているのは、ほかならぬマルリーブ夫人自身だとの、ダーラムの指摘は鋭い。これに対する、夫人の『「私は息子のためにフランスに住まねばならないのです。」』(169)との返答は、形骸化した妻としての立場に固執しているとは感じさせない一方で、母親としての自己存在には執着するマルリーブ夫人の葛藤を明確に表現している。妻であることより、母親であることを選び、実の娘の叔母役に徹しながら、密かに母親の愛を貫いた*The Old Maid: The 'Fifties* (『二人の母—1850年代』)のシャーロット⁹⁾に重なるのが、マルリーブ夫人である。

問題は、彼女に、母親であることだけしか認めないフランス社会にあることを、ダーラムが理解するのに時間はかからない。しかも、母親であるためには、いかに形骸化していようとも、妻としての立場を維持することを要求するフランス社会の冷酷な形式主義に、マルリーブ夫人は苦悶している。彼女は現在、フランスに住むという条件下で、息子の養育権を手に入れているが、そもそもすでに5～6年にも及ぶ公爵夫妻の別居を招いた原因は、『「あの家族ですら、彼女(ファニー)を支持して、別居するよう勧めなければならなかった』』(183)ほど卑劣な行いをしたマルリーブ公爵にある。作品中で具体的に夫側にどのような行為があったのかについては触れられていないものの、マルリーブ夫人が

将来息子をその影響下に置きたくないと考えていることから推察すれば、女性問題であろう。全面的に道義的責任を負う問題を起こしたのが夫でありながら、なお、妻の行動に制限を加える点こそ、性道德の男女別二重規範を黙認する、フランスの家父長制社会が内包する問題である。

ファニーの苦境を救うために手をさしのべようとするダーラムを驚かすのは、『『そもそも離婚には一彼らが決して同意しませんわ』』（傍点筆者。174）との、マルリーブ夫人自身の諦観である。離婚が、法的には是認されていたものの、社会的には容認されていなかった時代が、かつてアメリカ社会にもあった¹⁰⁾。しかしダーラムにとって、結婚や離婚といった個人の意志がもっとも尊重されるべき問題に関して、ファニーが「夫の個人的な主張よりむしろ、一族全員の利益が考慮されるべきかのように話した」（174-175）ことは驚きであり、しかも、「複数の代名詞を使ったことが、暗い中世の残存物を垣間見たように、彼の自由な個人主義に衝撃を与えた。」（175）個人としての生き方をなにより尊重するアメリカ社会と、家制度（たとえそれが個人に犠牲を強いてのみ成り立つものであるとしても）を尊重するフランス社会の価値観の対立が明らかとなる。

離婚への障壁には、もう一点、フランス社会特有の事情がからむ。マルリーブ公爵の姉で、公爵家の代弁役を務めるトゥレム夫人がダーラムに放った『『私たちにとって、家族のことを考慮するのはなによりたいせつなのです。しかも私たちの宗教は離婚を禁じています。』』（191）との弁明は、マルリーブ家が離婚を認めない理由として、家制度と同様にカトリック教が便宜的に利用されていることを示す。「マルリーブ夫人はカトリック教徒に改宗してはいなかった」（187）にもかかわらず、この絶対的教義に抵触する行いは許されない。内面的強制力で人を縛り、結果として人を不幸にする宗教倫理をふりかざされたとき、ダーラムは、外面的強制力を伴う法の判断を仰ぐことを決意する。マルリーブ一家の見えざる報復を極度に恐れるファニーに、ダーラムは、楽観的な信頼感をもって応じる。『『文明国といってよい国にあって一策謀を練って法の決めたことを阻止しようとする怖い人物って誰なのだ？…僕はその手の暴力

集団など恐れはしないよ。』(175) アメリカ人にとって、個人の権利を守るために裁判に訴えることは当然である。だが、長年カトリック教と向きあって生きてきたマルリーブ夫人には、日常生活を支配する教義の、無言の圧力に屈しないことの難しさが身にしみている。フランス社会では、たとえ法による解決がもたらされても、教会の出す答えこそ絶対的なものだから。

作品は、離婚裁判をおこすことに抵抗していたマルリーブ夫人が、ついにマルリーブ家の許可を得て、裁判に同意する展開となる。しかし、判決を待たずして明らかになったマルリーブ家の策略は、ファニーのダーラムとの再婚が、彼女から母親としての権利を剥奪し、息子の親権がマルリーブ家に委ねられることにあったのだ。この結果から判断すれば、法的手段に問題解決を委ねたダーラムの判断は、狡猾なフランス社会相手では単純すぎたことになる。マルリーブ夫人は、妻としての再出発と、母親としての幸福を同時にかなえることを許されない。フランス社会の家制度とカトリック教教義との二重の壁に阻まれ、固く閉ざされたマルリーブ夫人の離婚への道のりの厳しさに、個人主義を信奉するアメリカ人ダーラムの無知・無垢と紙一重の単純さが、逆照射されているようだ。

次に、母親としてのマルリーブ夫人の側面について考える。唯一マルリーブ夫人に許された母親としての役割に、彼女自身はどのような意義を見出しているのだろうか。結婚して15年の年月が過ぎた今も、よそ者としての疎外感・孤独感と闘うマルリーブ夫人にとって、8歳の息子は彼女とフランス社会をつなぎとめる重要な役割を担う。『彼らを信じないのは、もう長年の習慣ですの—彼らが言わないことにいつも真実があるので、それを捜すことにしています。』(201) というフランス社会は、『あいまいさや、秘密のない、あの澄んだアメリカの空気』(174) とは対照的に、排他的で、謎めいており、ここで生きぬくためには、「精神的な奴隷状態」(210) でなければならない。そんなマルリーブ夫人にとって、息子が生きる喜びであることは疑いようがない。しかし、彼女とフランス社会とのつなぎの役割だけを息子に担わせるのであれば、母親であることには、消極的な意味しか派生しない。だが、マルリーブ夫人が息子

の養育に見せる決意には、彼を、このフランス社会の求める人物、すなわち第二のマルリーブ公爵にはしまい、との、積極的な意志がこめられている。その目的のために、マルリーブ夫人が闘ってきた相手は、夫個人というより、「家族という組織」(172)であり、その家制度を包括する「さらに大きな制度」(172)、つまり、フランス社会そのものであった。ここにも個人を基本として成り立つアメリカ社会と、家族を基本的構成要素とするフランス社会との対立構図が明らかにされ、読者は孤軍奮闘するマルリーブ夫人の苦悩の深さを知る。アメリカ社会を離れた彼女が、フランス社会の一員となって、アメリカの良さに気づくのは皮肉でもある。マルリーブ夫人はフランス社会でも部外者であり、アメリカ社会の部外者でもある。この微妙な立場にいるからこそ、それぞれの文化を客観的に見る事が可能であるともいえよう。いずれにせよ、彼女が母親として、息子に伝えようと選んだのは、自分で考え、判断するアメリカ的な価値観や生き方である。

フランス社会は「容認された偏見と意見」(172)で構成されており、「政治や宗教上の信念、人を判断する力、道義心、女性観、人生観のすべて」(172)を自分で育てていくのではなく、あらかじめ与えられて育つ社会である、とマルリーブ夫人はダーラムに説明する。それゆえに、マルリーブ公爵の犯した罪すら、個人的な責任を問われることなく、マルリーブ家全体で穏便に対処すべき問題となる。個人的な結婚生活・家庭生活の幸福は、家全体の安寧秩序を守るためには、犠牲にされるべきものと考えられる。そもそも結婚とは家制度を存続させるための手段にすぎず、マルリーブ家の未来の当主を育てる目的が達せられれば、個人の不幸など無視される。そしてマルリーブ夫人は、この目的のために、息子が学齢期に達すれば、教会が母親の役目を奪っていくことも承知している。だからこそせめてその時まで、自分の価値観で息子を教育したい、とマルリーブ夫人は願うのだ。『「彼（息子）は私の影響下を離れた瞬間に、もうひとつの影響下に入ってしまう—彼が生まれて以来ずっと私が抵抗してきたあの影響下に！」』(171) アメリカと比べて乳離れが遅いフランス文化にあっても、マルリーブ夫人に残された母親としての時間は長くはないし、この

息子の将来に関する状況は、あまり楽観できるとも思えない。しかも彼女は、息子がフランス的価値観をもち、フランス的生き方をするようになることに、真に抵抗してきたといえるのであろうか。

現実的なダーラムはファニーに未来のマルリーブ公爵を予想し、彼の母親の「『犠牲が無駄であること』」(172)を率直に述べている。「『おそらくね、結婚するとき、君の息子が、自分の階級や身内の生活に引き戻されてしまうのは必至だよ。』」(172)ダーラムの鋭い観察は、マルリーブ夫人が「夫と、結婚と、結婚によって導かれた世界とを、憎悪していた。だが彼女は、外向きの表現を使えば、この世界の産物になっていた」(179)ことを見逃してはいない。彼女が離婚裁判に同意しないのも、家制度を尊重するフランス的な価値観ゆえである。「どのようなスキャンダルも評判も絶対許されない。当然ながら細心の注意を払いつつ、外見を取り繕うフランスの伝統に則って育てられた彼女の息子が、将来、紋章のたくさんついた自分の楯にほんのわずかな汚点も見つけることのないように」(176)彼女は自己犠牲を厭わなかった。しかし彼女のこのような姿勢が、彼女の意図とは逆に、息子をまさにフランス的な形式主義者で、なにより家制度を尊重する人物に育てるのだ。母親としての役割を奪われる時期が近づいていると描写することで、ウォートンは、マルリーブ夫人のさらに苛酷な人生を予見してみせる。息子が就学して以降の、彼女の長く辛い、孤独な人生を思いうかべると、今のところ、大きな喜びと生きる活力をもたらしている母親としての一面も、むしろその後の人生の苦悩を助長することになると危惧される。

II

次に、ファニーとの結婚を実現させようとダーラムが行った、マルリーブ家を代弁するトゥレム夫人との五回にわたる直接対話を中心に、フランス社会に生きるフランス人女性の苦悩を見てみたい。この小説の題名『トゥレム夫人』が示しているように、作品の焦点はトゥレム夫人とダーラムの抑制のきいた知

的応酬であり、二人の会話を通して、ファニーとダーラムが直面する問題だけではなく、トゥレム夫人自身の苦悩、また、それらの原因となっているフランス社会の抱える問題が明らかにされるのである。

ファニーの離婚を実現させるために、マルリーブ公爵の姉で、マルリーブ家で『もっとも権力をもった人物』(177)であるトゥレム夫人と対話を重ねるうちに、鋭い観察者であるダーラムは、フランス人の考え方や社会のあり方について理解を深め、結果的に人間的成長を見せる。トゥレム夫人は、これまでもマルリーブ家で孤立するファニーの『常に味方となってくれる』(177)唯一の人物であり、『私は彼ら(マルリーブ家)の代弁者にすぎない』(196)と自認しながら、確かな倫理観に基づき、離婚を実現させることでファニーを彼女なりに救おうと努力する。だが、彼女自身がフランス社会の犠牲者であるため、結局は三人全員が、望む生き方を選択できない苦悩の結末を迎える。

ダーラムは、母親と二人の妹を伴い返礼で訪問したファニーの自宅で、初めてトゥレム夫人と出会う。この時の話題は「厳密に型にはまった」(181)内容に終始したのだが、「夜営しているアボリジニを、瞬きもせず注意深く観察する文明人の見学者」(180)と形容されるトゥレム夫人は、「うっかり顔に出る以上にずっと多くを理解している」(180)のをダーラムは見逃さない。フランス人の夫人が、義理の妹の知人である四人のアメリカ人たちを、文化的に劣った人間として、冷徹に観察している様子がうかがえる。アメリカ人ダーラムにとっても、フランス人トゥレム夫人にとっても、お互いが未知なる人間であるのは同じだ。しかもお互いが深い洞察力で相手を観察し、理解し合おうと努力する過程を経て、最終的な共感へとつながる結末は感動的ですからある。作品の最後で、実はこの場面ですでにトゥレム夫人が、ファニーにとってのダーラムの重い存在をみぬき、弟とファニーの離婚に同意することを決めていたことが明らかにされる。トゥレム夫人は確かな判断力と決断力をもった人物である。

二回目のトゥレム夫人との対話を実現させるために、在仏25年のいところ *Elmer and Bessy Boykins* (エルマーとベシー・ボイキン夫妻) から夫人に関する情報を収集したダーラムは、夫人のただならぬ不倫関係を知って驚く。賭

博ですでに身内の財産を使い果たしたことで悪名高い貴族the Prince d'Armillac (ダルミヤック公爵) のためにトゥレム夫人がお金をつぎこんでいるという。ダーラムはやがてトゥレム夫人自身から、彼女の窮状について知らされることになるのだが、この設定は、結婚生活・家庭生活に苦しんでいるのが、ファニーだけではないことを暗示しており、トゥレム夫人が義理の妹の苦境に理解を示す理由とも考えられるのではないか。

ボイキン夫妻は、ダーラムのためにトゥレム夫人との直接対話を設定する役割を担っているだけではない。読者は四半世紀をフランスで過ごしている彼らの、フランス社会に対するコメントを通じて、フランスとアメリカの比較を提示される。興味深いのは、夫妻が母国を去ったのは洗練されたフランス文化を求めてであったにもかかわらず、アメリカの富を利用するだけのフランス人を受け入れることができずに、ほとんどフランス人と交流することもなく暮らしている点である。フランス貴族との知己を得たいために、物の価値もよくわからぬまま湯水のごとく浪費する成金的アメリカ人と、アメリカ人の現金が欲しいために慈善市を開催するものの、それ以上のつきあいを避ける偽善的フランス人の、双方の愚かさや醜さは、作品中幾度も語られる。だが、まさにこの富を利用し、「慈善市での惜しげもない出費」(187)でトゥレム夫人の歓心を買うことに成功したダーラムは、老マルリーブ公爵夫人のお茶会に招待され、トゥレム夫人との二回目の対話をもつ。

歴史を感じさせる老公爵家の邸宅は、堂々とした門構え、壁に飾られた中世の先祖の肖像画、壮麗な調度品でダーラムを圧倒し、「見るからに似通った伝統、衣装、態度、作法」(188)で集っている貴族仲間と、彼らに仕える使用人たちの、こぞって排他的な雰囲気は、ダーラムを当惑させる。ダーラムがファニーの恐れる「神秘的な危険」(188)を、初めて体験し、理解したのはこの訪問時といってよいだろう。したがってトゥレム夫人が、困惑しているダーラムを庭に連れだしたとき、夫人が精神的優位に立っていたのはまちがいない。そして、明快な表現に慣れたアメリカ人を、あいまいな言いまわしで惑わすことなく、夫人はファニーとの結婚の意志をダーラムに率直に問う。これは、マル

リープ家の一員としてではなく、個人として、真摯に義理の妹の問題に向き合おうと決意した夫人の姿勢を暗示していると思われる。だが、この対話でダーラムが得た回答は、宗教上も体面上も離婚がマルリープ家では認められないとの公式見解だけであり、ダーラムは、ボイキン夫妻宅での食事の誘いに、トゥレム夫人から承諾を得るのが精一杯であった。

三回目の対話は、ボイキン夫妻宅での食後であるが、このときも会話の主導権を握っていたのは、トゥレム夫人である。そもそも二人だけで話したいとの意志を巧みに示したのも夫人であった。この対話では、彼女自身の窮地が暴露され、会話は思わぬ方向に進むが、導入部はいかに衝撃的であったにせよ、トゥレム夫人の計算どおりであったと思われる。つまり、夫人はファニーの苦悩と自分の置かれている状況の共通点を挙げることで、ダーラムの共感を得て、ファニーを救うだけでなく、自分自身が苦境から脱することももくろんでいたのだ。しかし、フランス人とアメリカ人の倫理観の相違は、夫人の大きな誤算であったにちがいない。

この対話で明らかとなるのは、一見家母長制社会と思われるフランス社会のからくりと、そこに生きる女性の苦悩である。同居している実母老マルリープ公爵夫人の絶対的な力について、トゥレム夫人は作品中数回言及するが、実際には母親に対する彼女の影響力の大きさは、本人の認めるところでもある。「『私はいまだに母親に大きな影響力を持っていますし、母親が命じることを私たち全員がするのです。』」(197) だが、ファニーに離婚を認めないマルリープ家の方針が示すように、女性たちの判断と行動は、伝統的な男女の性別役割意識に基づいた枠組みを逸脱しない範囲内に限定されている。また、トゥレム夫人の「『私、お金を貸しているのです—夫と弟のお金を—自分のものでもないお金ですわ。しかもそれを返金するお金がまったくないのです。』」(197) との告白も、父権制社会で経済的な力を男性に握られて生きる女性の生のもろさを露呈する。

不幸な結婚生活を送る女性は必ずひどいことを言われますでしょ？ おそらくあな

たの幸運なお国では言われないのでしょね、不幸な女性は恥さらしとならずに解放を求められるのですから。でも、ここでは—！ 私たちの悲惨な結婚の結果をあなたはごらんになったでしょう—あなた自身、私たちの残酷でおぞましい制度の犠牲者かもしれません。同じように苦しみ、自由になる可能性のない人間に、あなたは憐憫をもたれませんの？ (198)

女性の尊厳を損なうことなく離婚が認められるアメリカ社会と比較して、フランス社会の、硬直した家制度に縛られて生きねばならない女性の苦悩を、このようにダーラムに訴えるトゥレム夫人は、一見家母長制社会と思われるフランス社会が、実はその上に家父長制を頂く二重構造の社会であることを示してみせる。カトリック教に裏うちされた強固な道德律と、伝統による明白な男女の性別役割分担を課すことによって、女性が女性を縛り、さらに男性がその頂点に立つ社会で、女性は犠牲者として忍従するしか、生きる術をもたない。家制度に組みこまれてしか生きられない女性にとって、家族とは絆であると同時に拘束でもある。そしてトゥレム夫人自身も、その犠牲者であったのだ。

このように不幸な結婚生活・家庭生活が、トゥレム夫人を「『競馬クラブ最大の誇りで、淑女を虜にする』」(185)と評判のダルミヤック公爵との不倫に駆りたてたであろうことは、容易に推測できる。フランス社会の女性の、苦悩を抱えた生き方に、ダーラムは心から悲しみを共有するものの、他方、不倫関係に感情のはけ口をもつことは、「女性との複雑ではない経験」(197)しかもたない彼の倫理観の許さぬところでもある。マルリーブ公爵が離婚訴訟に反対しないとの決意をしたと聞くまで、ダーラムはファニーとキスすらかわさなかったし、離婚裁判の判決が確定するまでパリを離れることで、ファニーの体面に傷をつけないようにとの配慮を示すほどダーラムは慎重であるし、なにより、トゥレム夫人の「『あなた（ダーラム）の民族はこのような逸脱を厳しく判定すると聞いておりますわ』」(190)との感想が、アメリカ人とフランス人の性道德規範の少なからぬ相違を表わしている。

個人的な対話が三回目にすぎないトゥレム夫人の、不倫に関する大胆な告白

は、ダーラムの認識するラテン民族特有の懺悔の慣習に因るだけではない。彼女は、『あなた方アメリカ人は、なにか欲しいものがあると、実際の価値の十倍をいつも払う』（198）ことを利用しようともくろんだのだ。トゥレム夫人は、ダーラムにファニーとの結婚の権利を買わせ、そのお金を愛人ダルミヤック公爵が抱える賭博の借金返済に充てようとしたのである。外聞をなにより重んじるフランス貴族としての自尊心を捨てて、このような提案をしたことに、トゥレム夫人の深刻な窮状が明らかであろう。彼女の目的を理解したダーラムに、決断を下すための時間は必要ではない。「彼の血に流れる慣習的な力のすべてが反旗を翻した。」（199）条件をつけずに自分を窮地から救うようトゥレム夫人が頼んでいれば、結果は彼女の望むとおりであったかもしれない。しかし『あなたが提案した私への返礼ゆえに』（199）、ダーラムはこの誘いを断るのである。この対話の最後では、ファニーへの愛をお金で買うことを拒絶したダーラムが、精神的にトゥレム夫人の優位に立ったことはまちがいない。「心から、そして、いたく困惑した」（199）トゥレム夫人の表情は、ダーラムの考えを理解不能であると示しており、フランス人とアメリカ人の倫理観の大きな相違を見せつけている。だが、自嘲げみにファニーに今回の顛末を話してもよいと告げるトゥレム夫人は、自省をこめて、ダーラムの高い倫理観に敗北を認めたのではないだろうか。

六月末にファニー宅で四回目の対話をもったとき、トゥレム夫人とダーラムの関係には、大きな変化が見られる。むろん一見劣勢に立った自分の立場をあからさまにするほど、トゥレム夫人の感情表現は率直ではない。これより前に、ダルミヤック公爵が逮捕を逃れるために出国したとの醜聞を耳にしていたダーラムは、先回の対話結果にもかかわらず、マルリーブ家がファニーの離婚訴訟に同意し、裁判手続きが開始されていただけに、自分がトゥレム夫人を救わなかったことに自責の念を強めていた。自分たちの結婚が実現可能なものになりつつある一方で、ダルミヤック公爵の一件は、トゥレム夫人の離婚を予測させるほどの醜聞であったからだ。このため、この対話の間、ダーラムがトゥレム夫人に抱く感謝の念を表わす単語は、いずれも宗教的倫理観に基づく謝罪のこ

とはrepentance「悔い改め」(208) expiation「罪のあがない」(208) compunction「罪の意識」(209)と一体化されている。ファニーとの結婚をお金で買うよう提案されたときは、彼の高い倫理観がそれを受け入れさせなかったものの、その拒絶によってトゥレム夫人を救えなかったことに対して、ダーラムは後悔の念を隠さない。

一方、ダーラムの感謝と謝罪に対するトゥレム夫人のことばの応酬は、意味が明白ではなく、ダーラムを当惑させる。しかしそのあいまいな表現に、トゥレム夫人はマルリーブ家がしかけた罠に注意を促す、彼女なりのメッセージを発信し続ける。感謝と謝罪を形にしたいとくりかえし訴えるダーラムに対し、夫人は現在完了時制と仮定法を駆使した表現と、「捕えどころなく、あいまいに」(209)微笑む表情で、単純に彼女とマルリーブ家を信じて喜ぶことに警告を発するのである。だが、この対話の最後に、ダーラムとファニーが幸せになることに報いを感じているとつけ加えた夫人のことばは、自らの苦悩をファニー解放の実現へと昇華させたことへの自負心を表わしたものと思われる。

舞台は初秋、離婚裁判の判決が確定していない状態で、ダーラムが五回目の対話をトゥレム夫人ともつ場面で小説の結末を迎える。ダーラムがマルリーブ家の策略を知らされる過程で、トゥレム夫人を理解し、最後の決断を下し、同時に、トゥレム夫人が彼のファニーへの深い愛を知り、彼を真に理解するに至るこの対話は、この小説のクライマックスとってよかろう。

三回目の対話時にトゥレム夫人が提案した駆引きを、ダーラムはファニーに告げることはなかった。ファニーとの結婚をお金で買うことも、彼女が信頼しているトゥレム夫人の窮余の策を、このような形でファニーに知らしめることも、彼の高い倫理観が許さなかったからである。この事実をふまえてトゥレム夫人がダーラムと行った五回目の対話は、彼の高潔な人格にふれて人生観が変わった夫人の自省の弁によって始まる。夫人が再認識したのは、フランス人とアメリカ人の「『異なった名誉の意味』」(215)であり、ダーラムがお金の力を使って彼女を救わなかったことで、彼女は現実的な苦しみを味わったものの、自分を見つめなおす機会を与えられ、結果として精神的に成長した、と素直に

告げる。

四回目の対話時に感謝と謝罪をくりかえすダーラムに見せた、ファニーとの幸福を願う寛大さは、実は、ファニーの再婚によって未来のマルリーブ公爵を奪回できるとの判断に裏うちされていた、と続いて暴露するトゥレム夫人は、ダーラムに狡猾な自分を曝すことが、彼の誠実さに報いる真摯な方法であると考えているように思われる。別居後も行いを改めない父親に戻されるファニーの息子の不幸を思いやるダーラムに対し、「『あなた方は個人に関心を払い—私たちは家族のことだけを思うのです』」(217)と、トゥレム夫人は総括する。新たな不幸や悲劇を生むのを承知で、なお、家制度を死守しようとするトゥレム夫人は、しかし、せめてファニーには家制度という呪縛からの解放を与えることで、ダーラムの高潔さに応えたかったのだ。ダーラムはファニーの幸せを託すことができる人物であるとの、トゥレム夫人の判断は正しいとしても、息子を失ったファニーの悲しみが、再婚で生まれるであろう新しい命で償われると想定したのは、大きな誤算であったし、なにより、ファニーが自分の幸せと引き換えに、息子を家制度存続の手段として手放すような人物ではないと思いつかなかったのは、家制度に縛られたトゥレム夫人自身の限界ではないか。

さらに大きな誤算は、ダーラムが、その場で、マルリーブ家の策略をファニーに告げようと即断したことであった。それが彼自身との再婚を不可能にすることを意味しても、息子を手放すのを避けられるのであれば、ファニーにとっての幸せである、とのダーラムの判断は、彼の高い倫理観とファニーへの深い愛に基づいている。さらに、手遅れになる前に、自分に二人の未来を選択する機会を与えてくれたトゥレム夫人に感謝するダーラムは、「『あなたは、かわいそうな、善良な方だ!』」(222)と叫ぶ。トゥレム夫人がファニーとダーラムの幸せを願ったことは、死守すべき家制度を一時的にせよ自ら破壊した、という重い意味をもつことに、ダーラムは気づいたからだ。その意味は、家制度に縛られた夫人自身の苦しみを思うとき、さらにその重みを増すのである。他方、「『ああ、あなたは、かわいそうな、善良な方!』」(222)と叫びつつトゥレム夫人の見せた涙は、自分の幸せを犠牲にして、愛する女性を守ろうとするダー

ラムへの、敬愛の念の証であり、結局は家制度を打破できないことに対する自己憐憫を示すものでもあった。

おわりに

『トゥレム夫人』は、アメリカを離れフランス人と結婚したアメリカ人女性マルリーブ夫人と、この義理の妹を不幸な結婚生活・家庭生活から解放しようとするフランス人女性トゥレム夫人の、それぞれの苦悩を描いた作品である。二人が苦闘するのは、フランス社会が、その長年の歴史をかけて培ってきた、家制度という名のしがらみであり、その制度の根幹にある家父長制度である。トゥレム夫人との対話を通じて未知なるフランス社会への理解を深めながら、結局マルリーブ夫人との結婚を断念するアメリカ人ダーラムの味わう苦悩が、結果的には、社会の犠牲となる二人の女性の苦しみをさらに深めてしまう。

マルリーブ夫人の苦悩は、彼女がフランス社会に生きるアメリカ人であるということに起因する。個人の生き方を尊重するアメリカ的価値観と、家制度存続のために自己犠牲を求めるフランス的価値観が、マルリーブ夫人自身の中でせめぎあう。結婚によってフランス貴族社会に組みこまれたマルリーブ夫人の15年は、「忍従する」妻と「慈愛に満ちた」母親という、家父長制社会が求めるままの女性像を演じる歳月であった。しかも別居生活がすでに5～6年に及んでいながら、離婚は認められないという彼女の置かれた状況は、まさしく家制度の犠牲者としての象徴そのものである。

妻としてのマルリーブ夫人の苦悩は、家父長制度が内包する負の一面である性道徳の二重規範に因ることは示唆されるが、この作品で強調されるのは、むしろ、8歳の息子の母親であるがゆえの、夫人の苦悩である。母親としての役割は、妻としてのそれよりも重い負担を、時に女性に課すのではないだろうか。なぜなら、マルリーブ夫人を家制度に拘束するものは、母親としての存在そのものであるからだ。醜聞の回避やカトリック教の教義を楯に、彼女を拘束するマルリーブ家の外的力が大きく作用していることはむろんだが、母親としての

深い愛が、結果として彼女をマルリーブ家に留めていることに注目しなければならない。また、伝統や慣習に束縛されないアメリカ的個人主義者に息子を育てることこそ母親としての使命である、と信じつつ、他方、伝統を引き継ぐフランス貴族としての息子の将来に、自らの離婚が汚点を残すことを恐れる、マルリーブ夫人の矛盾に満ちた母親像は、アメリカ的価値観とフランス的価値観のせめぎあい揺れる彼女の苦悩の象徴といえよう。しかも、やがて学齢期を迎え、教育が母親から教会の手に渡り、フランス社会の価値観を体現した人間に育てられていくであろう息子の未来を想像すると、マルリーブ夫人の忍従の生活はまったく報われぬものであることに、読者は暗澹とした思いを抱く。

義理の姉としてマルリーブ夫人の苦悩を共有するトゥレム夫人も、同様にフランスの家父長制社会の犠牲者である。ウォートンがこの作品で描くフランス社会は、一見家母長制社会でありながら、女性たちの行動規範が、家父長制を破壊することがないよう巧みに操作された社会であるために、彼女たちのさらに深い苦悩を炙りだすのに成功している。

老公爵亡き後のマルリーブ家で実権を握るのは、老公爵夫人に絶対的影響力をもつトゥレム夫人であるとされ、たとえば、逸脱行為をした弟マルリーブ公爵に関して、トゥレム夫人は性道德の二重規範を黙認するのではなく、批判的表現で語り、マルリーブ夫人の苦悩に共感を示し、別居を認めてもいる。だが、なお弟夫婦の離婚に合意しないのは、家制度の存続を願う義務感からである。同時に、トゥレム夫人自身の報われない不倫関係は、結婚生活の不幸を味わっているのが、マルリーブ夫人だけではないことを読者に示唆する。しかも経済的な力をもたない女性には、困窮した状況を脱するいかなる手段も与えられていない。このため、窮余の策でダーラムにファニーとの結婚の権利を買うよう提案するトゥレム夫人は、実は彼女自身が家父長制社会の犠牲者そのものであることを暴露している。さらに、最終決断として、幼い甥がマルリーブ家の手に渡ることを前提条件に、弟夫妻の離婚に同意した時点で、トゥレム夫人の苦悩はさらに深まる。家制度存続を求めることが、結果として、マルリーブ夫人の母親としての幸せを犠牲にすることを意味するのであり、自らがその罪に荷

担することをも意味するからである。

だが、ダーラムの、高い倫理観とファニーへの深い愛に阻まれて、二度までもトゥレム夫人は、ダーラムとの交渉に失敗する。しかしその交渉過程において、トゥレム夫人はアメリカ人とフランス人の価値観や考え方の相違を体験し、多くを学ぶ。とはいえ、生まれ育ったフランス社会の価値観を捨てざるほどの劇的な変化が彼女にもたらされたわけではない。むしろ、トゥレム夫人が選んだのは、家制度を崩壊させない範囲内で、義理の妹の幸せもかなえようとの、苦しい選択である。つまり、最終的にトゥレム夫人が見せるのは、マルリーブ家存続のために、マルリーブ夫人と息子を引き離す非情であり、だが、弟夫妻の離婚を認めることで、ダーラムとマルリーブ夫人の結婚に道を開こうとの温情である。

トゥレム夫人が最後に見せた、紙一重の非情と温情は、結果としては事態をなにも変化させない。マルリーブ夫人が、離婚から再婚への道ではなく、母親として生きる道を選ぶこと、換言すれば、妻としての新たな幸せを犠牲にして家制度存続の道を選ぶことを、トゥレム夫人は見ぬけなかったのだ。この二人は、かつて異なった社会的・文化的背景に属しながら、しかし、同じく家父長制社会に組みこまれた女性の生き方を強いられ、それゆえ苦悩する点において、多くを共有する人生を歩む。家父長制フランス社会において、アメリカ人であれ、フランス人であれ、社会の犠牲になるのが女性であることを、ウォートンは二人の女性の生き方を通じて描いてみせたのだ。

付 記

この作品で使用されているフランス語やフランスの固有名詞に関しては、角谷美知先生にご教示を仰いだ。伏して感謝申し上げます。

注

- 1) Lewis, R. W. B. *Edith Wharton: A Biography*. New York: Harper & Row, 1975 p.164.

- 2) *Ibid.*, p.165.
- 3) *Ibid.*, p.173.
- 4) 拙論『暗礁』—アンナの選択— (光華女子短期大学研究紀要第37集) 参照。
- 5) 拙論イーディス・ウォートン『お国の慣習』—アンディーンの結婚 (『ジェンダーで読む英語文学』開文社出版) 参照。
- 6) 拙論『エイジ・オブ・イノセンス』—メイの生き方を中心として— (光華女子短期大学研究紀要第34集) 参照。
- 7) ウォートンのフランス (含むヨーロッパ全体) に対する思いについては、批評家の中でも様々なとらえ方がある。1919年に出版した *French Ways and Their Meaning* (New York: Appleton) で、ウォートンはフランス社会や文化を論じたが、彼女が描くフランスは、あるがままのフランスというより、自分の思いに添って彼女が作りあげたフランスであるとする批評家は多い。たとえば、Goodman, Susan. *Edith Wharton's Inner Circle*. (Austin: University of Texas Press, 1994) や Benstock, Shari. "Landscape of Desire: Edith Wharton and Europe" (Joslin, Katherine and Alan Price, eds. *Wretched Exotic: Essays on Edith Wharton in Europe*. New York: Peter Lang, 1993) など。また、ウォートン自身、後の1934年に出版した自伝 *A Backward Glance* (New York: Scribner's) でフランス社会や文化を再考し、フランスに対する複雑で矛盾した態度を書き表している。
- 8) Wharton, Edith. *Madame de Treymes and Others : Four Novelettes*. New York: Charles Scribner's Sons, 1970 p.165 なお、*Madame de Treymes* からの引用については、本文中に頁のみを記す。
- 9) 拙論『二人の母—1850年代』—母親の座をめぐる対立— (京都光華女子大学研究紀要第41号) 参照。
- 10) 1870年代初めを舞台にした作品 Wharton, Edith. *The Age of Innocence*. New York: Macmillan Publishing Company, 1968 p.111 において、弁護士ニューランドは、離婚が法律上認められていても、社会的には認められていないと明言しており、故郷ニューヨーク社会で離婚を承認してもらえ

ないエレンは、ヨーロッパに戻って孤高の生活を送るのである。

参考文献

Chambers, Dianne. "Female Roles and National Identity in Kay Boyle's '*Plagued by the Nightingale*' and Edith Wharton's '*Madame de Treymes*.'" *Critical Essays on Kay Boyle*. Ed. Marilyn Elkins. New York: G. K. Hall, 1997 pp.241-261.